

平和に真の寄与できる貴重な体験を語り伝えたいと願っています。

## 私の従軍記録

兵庫県 守本 茂

私は、大正九（一九二〇）年六月十五日、兵庫県養父郡養父町で生まれました。以下に私の軍歴の概要を申し述べます。

昭和十五（一九四〇）年

十二月十日 召集により鳥取中部第四十七部隊第

二機関銃中隊へ入隊

昭和十六年

三月 支那派遣のため宇品港出港

三月十九日 中華民国天津市塘沽港上陸

三月二十二日 河北省石家荘にて歩兵第一四〇連

隊に編入

昭和十七年

五月八日 浙贛作戦参加

九月二十二日 満州移駐のため山海関通過

九月二十五日 間島省延吉到着

昭和十八年

十二月十日 北部第三部隊専属のため鮮満国境通

過

十二月十四日 釜山港出発同日博多上陸

十二月十八日 旭川到着北部第三部隊配属

十二月二十三日 召集解除

昭和二十年

二月十五日 召集により鳥取突一〇一三四部隊歩

兵機関銃中隊へ入隊

八月十五日 神奈川県小田原にて終戦

九月五日 鳥取原隊復帰

九月十五日 召集解除

私が召集時の私の家族の状況は、農業を営む両親に八人兄弟姉妹（私は長男）で合計十人の家族で、私は農業の中心的働き手であり、応召は家族にとり痛手でした。父は以前から覚悟していたようでしたが、母は

ショックで一週間ほど寝込み町医者にもかかったとのことです。

十二月九日、役場の前へ集合。八人（鳥取は四人、岡山工兵隊一人、他の三人は別の所）、町長の挨拶があり、駅まで学童が小旗を振って見送ってくれた。山陰線で鳥取へ。役場の兵事係が一人付き添って宿舎へ一泊し、翌十日、鳥取中部第四十七部隊第二機関銃中队へ入隊しました。

さて昨日までの娑婆とは別世界の「人の嫌がる地獄の軍隊」へ。入隊以前から町内の先輩から種々と聞いていたが、予想を越える苦勞の連続でした。内地部隊での新兵教育の、就中内務教育の厳しき、残酷さ、非道さは、既に多くの口伝や文書で語り尽くされているので、本文での重複は省略するが、そのなかでも二つのひどい仕打ちについて述べます。

その一つは、営内で夕食後のこと。若い下士候の伍長が新兵に、「機関銃は兵器。軍衣袴は被服。兵舎は？」との質問に対し新兵は誰一人として答えられない

者が無いと言うことで、一晚中一睡もせず立ち通しの罰。途中で週番下士官が来たが見て見ぬふりで立ち去った。

その二は、午後の演習から帰營して内務班へ帰ると室内に綱を張って旗のように軍衣袴、襦袢その他の被服も吊り並べて、整頓棚はひっくり返してある。中村上等兵が「貴様等！ 何度言っても整頓をやらん。今日はその罰でこのようにした。○と×と□と◇と△と△はここへ来て一列に並べ！」と。私もその中の一人で横に並ぶと上靴の踵でビンタ。顔が紫色になるまで続いて叩き殴る。そのため歯が折れて口から出血する。それでもやめない。最後に他の上等兵が注意して止めた。軍隊内には歯科医はないので、町の歯医者へ行った。「これは顔の紫色といい、歯の骨折といい、叩き殴られた傷である」との診断書を隊内へ提出。ようやく残酷非道の私的制裁が明るみに出た。中村上等兵は取調べのうえ、営倉入りとか。とにかくひどいことでした。

演習訓練でのことです。鳥取は冬は雪が降る。東方

町の浜坂の砂丘の先の裏は海。訓練で走り回っていると水にぬれてベトベトになる。靴も中に水が入ってぬれる。翌朝靴をはこうと足を入れるが、水ぬれで靴が縮んで小さくなり、足が入らぬ。無理して足を入れてまた演習。足のあちこちに豆だらけ。夕方ヨーチンを塗って痛さに舞い上がり叫んだこと。鳥取での靴のため辛い苦勞は今でも忘れられない。

次に馬のこと。機関銃隊には馬はつきもの。新兵の間は、厩当番はなく助かった。最初の間は、馬の苦勞はなかったと思う。

北支、天津の塘沽へ上陸（昭和十六年三月）してから浙贛作戦参加（昭和十七年五月）まで、石家荘の南方の第一線へ出て駐留警備しました。治安良好で作戦討伐はなし。楽でした。

次に思い出深い浙贛作戦のこと。私の同年兵の栗田が「班長がひどい奴だから、殴りつけてやる」と物騒なこと甚だしい。私は懸命に彼をなだめて「やめと

け。軍法会議ぞ。辛抱せよ」とやめさせて事なきを得ました。

その次は玉山地区まで進攻した折り、突然マラリアにおかされて約一週間何も分からぬままで、気が付けば上海第二陸軍病院に収容されていました。幸いにも神仏の御加護の賜物か？ あるいは父母や家族のお祈りのお陰様か、健康を取り戻すことができやれやれでした。

次は満州延吉（昭和十七年九月―昭和十八年十二月までの間）で、馬のことで中隊長より賞詞を授与されたこと。件。浙贛作戦から延吉へ移った昭和十八年頃のこと、信父号<sup>シンプゴウ</sup>という抱く、蹴る、噛むと三癖揃いの悪い馬が私の受持ちとなった。私がどんなに優しく接しようとしても、悪い癖で私を寄せつけない。私は途方に暮れて考え悩んだ末、近くの農民から馬の好物のニンジン<sup>ニンジン</sup>を乏しい兵隊の給料をさいて買い求めました。一本を三個くらいに切断し馬の鼻先へ近付けてまづ一個を与えます。しばらくしてまた一個。馬はニン

ジンにつられて少しずつおとなしくなりはじめ、一週間、十日、二週間と経つほどに柔で穏やかな馬となり、蹄の手入れ、ブラシかけ、鞍おき等々難なくできるようにまで調教して上官からはめられました。

そのうちに中隊内に騎馬伝令が必要となり、私と信父号が任命され毎日走りました。走らせてみると悍馬だけに脚力も速力も申し分なく、中隊の皆に重宝がられて可愛がられました。

昭和十八年十二月、旭川北部第三部隊へ転属のため満州を去ることとなり、信父号との別離の悲しみに際し、思いもかけず中隊長より賞詞を授与され、隊付きの准尉が中隊全員の前で朗読し、私の榮譽をたたえ、信父号の調教を表彰してくれました。私の「善行証」も五か六にまで増えました。連隊内でも一番で班長さんも鼻高で喜んでくれました。私も馬との別れに際し、馬の鼻面を優しくなでてさすり、半ば涙声で「世話になった。元気で暮らせよ。皆さんに可愛がってもらえよ」としみじみ語りかけると、馬にも人の心が通

じるのか顔を寄せ別れを惜しむ仕草を見せる。人も馬もひとしお辛い別れでした。

昭和二十年に入り神奈川県の小田原へ行きました。米軍上陸に対して本土決戦用の陣地構築です。大きい横穴を掘り、天井からの落盤防止に丸太を鳥居型に組んで支柱に立てる。さらに掘り進む。建設労務者よろしく毎日頑張っておりました。

そして終戦です。すべて終わりました。

九月五日、鳥取の原隊へ復帰。九月十五日、召集解除、復員で私の従軍は終わりました。

戦後は再び農業に戻り、食料増産報国に精励努力し、昭和二十三年結婚。現在老夫婦ともに元気で農業に従事しています。子供は女、女、男と三人、孫は五人と嬉しい家族に囲まれて、毎日の戦没戦友への感謝と追悼に余生を捧げております。

最後に戦友会のことです。昭和十五年十二月十日、鳥取の部隊へ応召入隊した者約五十人くらいか？ 昭

和三十七年または三十八年か？ 初の戦友会を開き、参加者も三十〜四十人と盛大でした。そして昔の同年兵の親しみと労苦を分かちあった共感とを夜通し悲喜交々極めつくしました。翌朝別れが辛くて次の再会を堅い握手に託して別れました。

五年前には病没と治療のため二十三人に減員しました。今年の六月、城崎温泉での会ではわずか五人に減りました。高齢化と病弱化のせいでしょう。私はお陰様で元気で楽しんでます。最後まで戦死者のご冥福とご遺族のご多幸を、併せて祖国日本の繁栄、世界平和へ寄与を念じ祈っております。

全国の恩欠連の戦友の諸兄よ！ 願わくば、「戦争体験の労苦を語り継いで、より逞しい日本を目指して、親、子、孫へと共に頑張りぬくことを誓いましょう」

## 私の戦中戦後

兵庫県 衣川 義高

私は大正八（一九一九）年一月十七日、兵庫県朝来郡東河村宮において父辰次、母静江の長男として生れました。

第三人、妹三人の七人兄弟でした。父母は農業を営んでおり、子供が多くて大変だったと思います。

私が小学校を出た昭和六（一九三一）年といえは満州事変が起きた年で、当時の農村は大不況で、私の村は戸数三四〇戸の小さな村でしたが負債はなんと六十万円で、当時の金額としては大金です。農村負債救済に関する全国協議会の決議文を携えて兵庫県代表として藤原村長が上京し、「犬飼首相ほか関係大臣に陳情し、政府貸付け自作農資金の無利子五カ年間償還延期を獲得す」と村誌に書き残されています。

当時の子供は学校を出ると、それぞれ職を求めて半